現代の殉教者・コルベ神父（下）
～長崎巡礼⑮～

私たちは時代の中に生きている。少なからずその時代の影響を受けて。例えば戦前の軍国主義の時代に生きた人たちは個人的な自由は少なく、国のために命を捧げた人も多い。

今は個人主義の時代。この時代からどんな影響を受けているだろうか。目立つのは利己主義だ。

今から七十年前の一九四一年、ポーランドのアウシュビッツでコルベ神父は他人の身代わりになってナチス・ドイツの手で殺された。自ら申し出て殺されたこの事件は時とともに忘れられ、コルベ神父が六年間、日本にいたことも、知らない人の方が多いだろう。

今回、長崎の聖コルベ記念館を訪ね、そこで一冊の本を買い求めた。

「身代わりの愛」と題されたこの本はコルベ神父が創立した長崎・聖母の騎士修道院の小崎登明修道士が書いたものである。

小崎修道士は昭和二十年（一九四五）八月、長崎で被爆、その年の十月、コルベ神父が創立した聖母の騎士修道院に十七歳で入った。小崎登明は本名ではなく、修道士になった時に長上がつけた名前。豊臣秀吉によって殺された二十六聖人の一人、トマス小崎に由来し「トマス」は登明と書いた。

小崎修道士は今、八十三歳。直接会ったことはない。電話で何度か話をしたが、声は若く、大変元気である。彼はコルベ神父の国、ポーランドを十回訪ね、そこでコルベ神父の身代わりによって生き延びたガヨヴィニチェクさんに三回会っている。「身代わりの愛」はその時の様子を詳しく書いた本である。

人類の負の遺産、アウシュビッツ。第二次世界大戦の際、ナチス・ドイツが占領したポーランドをドイツ化するためにポーランド人政治犯を収容するためにつくられた。その後、ユダヤ民族抹殺の場となり、大戦が終わるまでの五年間に百十万人を超える人たちが殺された所である。

人々は貨車でここに送り込まれ、名前で呼ばれることはなく、囚人服の番号を左腕にも入れ墨で入れられる。コルベ神父は写真にあるように「一六六七〇」、身代わりで生き延びたガヨヴィニチェクさんは「五六五九」。人間としてではなく、ものとして扱われた。一挙に大量に殺すためのガス室や女性の髪の毛で作ったじゅうたんなどのことが克明に書かれている。

歪（ゆが）んだ民族主義、組織化された人間悪などいろいろ考えさせられるが、コルベ神父が自ら死を受け入れ、逆にそれらに勝利したようにも感じられる。「身代わりの愛」というタイトルはそれを暗示している。

私たちは自分の意志で選ぶことのできない「時代」の中で生きている。コルベ神父が生きた時代に比べ、今の時代、とりわけ日本という国の今は、これまでの歴史の中で最も個人の意志で自由に生きられる時代ではないだろうか。

にもかかわらず年間三万人を超える自殺者。今という時代をどう生きるか、考えさせられる。

どんな時代にあっても人間が真実に生きることができることをコルベ神父が証したようにも思える。聖なるものに近づく努力をして生きたいと思う。

アウシュビッツのコルベ神父を書いた本

小崎修道士と身代わりのガヨヴィニチェクさん（一九八三年）